
デート・ア・ライブで転生物

くらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デート・ア・ライブで転生物

【Nコード】

N0516BA

【作者名】

くらん

【あらすじ】

戦乱の世で多くの人々を救った青年は、自らの未練を晴らすため、『世界を殺す災厄』とデートしてデレさせる！？ 原作準拠。文章をひねり出すのが苦手なので更新は遅くなるかも知れません。地味にタイトル募集中。

「君は……」（前書き）

新年早々投稿。よろしくお願いします。

「君、は……」

それは、あまりにも非日常的な光景。

前に広がるのはまるで隕石でも落ちてきたかのようなクレーター。

後ろを見れば、およそ見渡す限り一定の高さにそろえて切断されたビルや街路樹が。

空を舞うは、無数の人影。

しかし、違う。そこに立つ青年　土道が気を取られているのはそんなものじゃあない。

目の前に立つ少女、彼女一人がこの世界の中で何よりも非現実的で、不可思議だった。

一つ束ねた髪は闇を溶かし込んだように黒い。

こちらを射貫く視線は、その目は何色とも言い難い幻想的な色を放っている。

そして女性の理想を体現したようなその貌は、物憂げに、見る者によつてはどこか悲しげに映る。

そう、つまり、彼女は

暴力的なまでに、美しい。

「君、は……」

問うた訳ではなく、ただ自然と口から漏れただけの声。

しかし、その声に少女は反応し、

「……名、か。 そんなものは、ない」

今度こそ、はっきりと悲しげな表情を浮かべた。

「……………」

そして、二人の視線が交差し

青年の世界は、広がり始めた。

「それは、嘘ってやつだよ」(前書き)

『彼』の口調が安定してないかも。

「それは、嘘ってやつだよ」

「……………これでは助かるまい」

青年は呟く。木々が鬱蒼と生い茂り、その合間を縫うようにしてわずかな木漏れ日が差し込む場所で『彼』は大木に背を預け、面倒くさそうに、どこか諦めたように。

髪はぼさぼさに伸ばしきり、顔には手入れの後も見られない無精ひげ。服はぼろぼろで、もはや何も無いよりはマシという位にしかなくていない。というのもほんのさっきまでの話で、今はその左肩から右脇腹のあたりまで深く斬られた痕があった。

そこから流れ出る血は『彼』の身体を赤く染め、止めどなくなれ流れている。このまま何もしなければ、いやこの調子では今からどうしようとも助かるまい。しかし、『彼』の表情に悲観は見えない。映るはやはり諦観。

(この戦国の世であれだけの人を助けることが出来た。……………俺にとって死ぬのには十分すぎる理由だ)

呟くことはない。言葉を紡ぐ気力すらない。しかし、もってあとわずかの命。ほんの少しでも世界に自分がいた痕跡を残そうと口を開く。

「ずいぶんとしぶとく生きながらえてしまった。……………がそれもここまでか。もうこの世に未練は、ない」

その言葉は、とても弱々しく、誰もいない森の中に溶け、聞かれる

こともなく消えていく

「それは、嘘ってやつだよ」

はずだった。

『彼』はその声にひかれるように上を見る。

そこにはヒトガタの光がふわふわと浮いていた。

「…………お主は何者だ」

『彼』は眼前のヒトガタを睨み付ける。射貫くように、鋭く。

「わお、殺気まで死にかけてたのに、もうその目つき。いいね」

対して、聞こえてくる声はどこか楽観的で、しかし不思議と落ち着くような声。

(…………妖術の類か?)

「む、ソレは失礼じゃないかな。僕はこれでもね「おい」…………人が話してるときになんだい」

話に割り込んだせいか、ヒトガタの言葉に少しいらだちが混じる。しかし、

「いま、俺は口に出してなかったはずだが？」

「そりゃ、僕は神様だし」

「おいおい……」

目の前のヒトガタの光は軽く、何でもないことのように答える。

(それにしても、神……か……)

「信じられない？」

「そりゃ、な」

「それじゃあ、君はさっきまで死にかけてたのに、しゃべれるのはなーんでだ？」

そういわれて『彼』はようやく気付く。自身の身体を襲う痛みがいつの間にか消え失せたことに。下を見ると、さっきまであふれるように流れ出していた血はもう止まっている。

「これはお主が？」

「せーかい。とはいっても傷をふさいだだけだから、このままじゃあ助からないのは変わらないけど」

「ふむ……なぜそのような中途半端なことを、それに俺の前に現れたのはなぜだ？」

「なぜ傷を止めるだけにしたのか、それは君が死ぬという運命をねじ曲げないため。そして君の前に現れた理由は、君が資格を持つ者だからだよ」

「資格……？一体何の資格だ？」

「『救済者』。自分以外の何かを助ける者、助ける事が出来るだけの力を持つ者。それが君なんだよ」

そして会話が一旦途切れる。『彼』は顎に手を当て思考し、そして

「助ける事が出来るだけの力を持つ者、か。
そんな力を持つのはなにも俺だけじゃ」「君だけなんだよ」……」
「まあ、この時代では、という条件はつくけどね」
「……ふむ、しかし、お主は神なのだろう？それなら俺が死んでからでも遅くはなかったのではないか？」
「いやー、そうできたら楽なんだけどねー。生きとし生けるものすべて死んだら真っ先に専門のところを送られちゃうからさ。いくら神といつてもルールはある程度守らなきゃだし」
「それはまた……」

そこでもう一度ヒトガタの光を見上げる。『彼』はすう、と目を細め

(さつきより輪郭がはっきりしている……?)

「そりゃ君が僕のことをある程度信用してくれたからだよ」

「そういうことか。……ソレでお主は俺に何用だ？神とやらがわざわざ出てきたんだ、なにか理由はあるものだと思うが」

「うん、まあ君が『救済者』ってのがそれに関係するね。」

君はこの戦乱の世で多くの人を救い、道を示してきた。それに対するご褒美みたいな者を与えに来たんだよ。

で、そのご褒美ってのがさ、どう？君は転生してみるつもりはない？」

いきなりの提案。しかし『彼』はそれに戸惑うことなく、さらに疑問を追求する。

「転生というと、つまり輪廻転生のことか？」

「うん、それぞれ。まあ記憶は失わないし、身体能力も引き継ぐこととなるけどね」

「……いいな、それは。よし、乗った」

『彼』がそう答えると、光は少し驚いたように揺らめく。

「……返事、はやいね。いいの？そんな簡単に決めちゃって」

「あまり深く考えても仕方有るまい。それに俺が未練を残している
といったのはお主の方だろう」

「……そう、だね。それじゃぱぱとやっちゃおうか。え〜っと、
さっきも言ったとおり記憶とか身体能力は引き継がれるから。ほか
になにかして欲しいこととかある？ある程度なら聞いてあげるけど」

その言葉を聞き、では、と『彼』は言い、右脇に置いていた刀を持
ち上げ

「これを転生後にも持って行きたいのだが」

「ん、いいよ、ってそれだけ？」

「ああ、それ以外に必要な者はないしな」

「そか、じゃあもう転生はじめちゃうよ？何か聞きたいことはある
？」

「ああ、それでは一つだけ」

「なにかな？」

一旦言葉を区切り、また口を開く。

「なぜお主は俺が未練を残していると思ったのだ？」

「ああ、ソレは簡単。」

だってさ、何かを目指してなかったら、諦めの表情を浮かべたりす
るわけ無いでしょ？」

「　　はは、確かに。なるほど、答えは俺自身が示してしまっていた、ということか。」

「いや、すまないな。つまらない質問をしてしまった」

「いや、そんな君を気に入ったから、ここにいるんだしね。それじゃ、もういいね？」

「ああ、ちゃっちゃと頼む」

そして、その言葉を最後に、彼がいた痕跡はその場から完全に消え去った。

「それは、嘘ってやつだよ」（後書き）

この話から色々突っ込みたい言葉に突っ込みだったり、役に立たない解説だったりをぶっこんでいきます。読まなくてもたぶん大丈夫。

<『彼』

第1章からの主人公のこと。『』はただの目印。ぶっちゃけ名前を考えてないので『彼』という扱いにしているだけ。すまない……っ！！

<戦国の世

日本の歴史において、15世紀末から16世紀末にかけて戦乱が頻発した時代区分である（wikiより抜粋）。色々浪漫あふれる時代背景で、ゲームなどでもよく取り上げられますね。しかし、戦国という名前ですが、毎日戦争だー！みたいな感じではなかったみたいです。当たり前ですけど。

<ヒトガタの光

よくある演出の一つ……だと思う。元々、作者はロリにしようかと思っていたのだけれども、あとでどうせロリキャラが出てくるじゃないかと思いきや、こっぴどい形に落ち着いた。

<妖術

Witchcraft, magicとも言う。

邪術が意図的な力であるのにたいし、これは非意図的な力とされるなど、色々あるが、詳しくはwikiなどを参照。

<神様

神、いわゆるゴッド……と冗談はさておき。

神とは一般的に宗教等において信仰の対象となるもの。

世界には信仰によって様々な神が存在するが、こんなスペースでは書ききれないので、詳しくはgoogleを参照。

<資格

ある行為を行うことを権限者から許された地位（wikipedia aより参照）

ここでは『彼』が神様から『救済者』であることを許された、都言う風な解釈になる。

<救済者

所謂メシア。まちがっても「私は飯屋なり！」とか叫んだりしてはいけない。

<転生

生まれ変わりのこと。最近はなろう！だとトリップが多くて、にじファンだと転生が多い気がするのは作者だけだろうか。

<刀

日本刀、ポン刀、ジャパニーズブレード。

戦国時代で流行ったのは主に打刀らしい。それ以前は野太刀、小太刀などが主流だったと聞くが……詳しい人は教えて下さい。

「えへへ……もう食べれないよ……お兄ちゃん……」(前書き)

兄：全体的に性能が50%UP!

妹：兄への依存度が38%UP!(当社比です)

お気に入り登録、ありがとうございます!

「えへへ……もう食べれないよお……お兄ちゃん……」

カチャカチャという音が朝のリビングに響く。テーブルには白飯、味噌汁、鯖の塩焼き、そして、前日作りすぎで残ったサラダが並ぶ。およそ一般的(?)と思われる和風の朝食。今日は両親が朝から仕事の出張で出かけていたのだ。両親は二人とも大手のエレクトロニクス企業に勤めており、しばしば家を空けることがあるのだ。

土道は朝食が並ぶ食器類を慣れた手つきで並び終えると、リビングを出て、二階へと続く階段へ向かう。

そしてひどく達筆な字で『琴里の部屋』と書かれている木札がぶら下がっている部屋の前に立つ。少年はコンコンコンと三回ノックし、返事がないことを確認すると、はあと軽くため息をつく。

「琴里、朝ご飯が出来たぞ」

まだ、返事はない。沈黙を保ったままだ。仕方ないと少年は考え、遠慮無く部屋に入る。そこには

「えへへ……もう食べれないよお……お兄ちゃん……」

ひどくゆるゆるな表情を浮かべた妹《琴里》が布団を抱え込むようにして眠っていた。

「琴里は、もうちょっと自分の力で起きることが出来るようになるうとは思わないのか？」

お茶碗を右手に、土道は切実な表情でそう言う。土道の妹である琴里はいつからか彼が起こすまで起きなくなった。それも平日だけではなく、休日も起こさなければ昏々と眠り続けて起きないのだ。一度試してみたが、さすがに夕食時まで眠っているのは不味いと思い、午後五時頃になって起こしたことがあるほどだ。しかし

「えー、だって朝はお兄ちゃんに優しく肩を揺すられて起きるのが私にとって最高の一日の始まりなんだぞー！」

この有様である。我が家の愛しの妹様には理屈は通用しないのだ。そこで琴里はそれに、といい

「早く起きちゃうと、お兄ちゃんのとーっても美味しい朝ご飯がすぐに食べられないしー」

「手伝おうという意識はないのか？」

「とか言いながら全部一人でやつちゃうのは何処のお兄ちゃんだー？」

「……はあ、しょうがない妹だ」

すると

『 今日未明、天宮市近郊の 』

そこで朝、妹がリビングに降りてきてすぐスイッチを入れたテレビに目を向ける。理由は簡単。聞き慣れた町の名前が耳に飛び込んで

きたからだ。

そして画面に目を向けると、そこにはまるでアメリカ映画のSF物で見るとような破壊され尽くした町並みが映っていた。

「空間震……か」

そう言い、妹とちょうど同じタイミングで中身が無くなった食器類を重ね、台所へ持って行く。その間にも画面は次々と深くえぐられた道路、崩れ落ちたビルなどの建造物が映し出されていく。

空間震とは、そのまま空間の地震と称される、広域振動現象。

発生原因、発生時期、被害規模、その他諸々が不明確な爆発だったり、振動だったりという現象の総称。

現象が確認されたのはおよそ30年前。ユーラシア大陸の中央部が一夜にして消失。死者およそ一億とんで五千万人、人類史上最悪の事件として人々の心には深く刻み込まれている。

それから約半年の間、世界中の至る所で小規模のそれ《・・》が続いた。

それは日本も例外ではなく、ユーラシアでの一件から六ヶ月後、東京都南部から神奈川県北部にかけて、円状に焼け野原となった。そこはちょうど土道たちが今暮らす地域と一致するのだ。

「しかし、また最近増え始めたな……」

そう、その南関東での空間震を最後に、しばらくそれは確認されなくなったのだ。

しかし、およそ5年ほど前、再開発が終わった天宮市の一角で空間震が発生してから、また少しずつ、その現象は確認されていったのだ。

そして、その多くは日本で。

もちろん人類も空白の25年で何も対策をしていなかったわけではない。

全国の地下シエルター普及率は爆発的に上昇、空間震の予測、自衛隊の復興支援部隊の設立などがよくわかる例だ。特に例に挙げた自衛隊の部隊は破壊され尽くした町並みを、わずかな期間で、まるで魔法のように復元してしまうのだ。

とはいえ、復興がはやくとも空間震の脅威が薄れるわけではない。

それに

「最近、近辺で妙に空間震が多いな。……去年あたりからか？」

「……んー、そーだねー。ちょっと予定より早いかなー」

と、琴里がテーブルの椅子に座ったまま言ってくる。ちなみに俺はもう皿洗いも終わり、妹の後ろで腕を組みながら立っている。

「早い？一体何のことだ？」

「んー、なんでもなーい」

そこで土道は妹の言葉を追求しなかった。しなかった。本人がなんでもないと知っているのだから、なんでもないのである。と何の根拠もない信頼を理由にしながら。

(きつと、こつこつ風に甘やかすが、いけないのかも知れないが……)

そんな風に考え、そこで目の前にある琴里の頭が目につく。白いリボンでくくられたツインテールが静かに揺れている。それを見て土道は妹の頭に手を置きゆっくりと撫で始める。

「んー、どーしたんだ、おにーちゃん？」

「いや、なんとなく撫でやすそうな頭だな、と思ったら手が勝手にな」

「それはほめられてるのかー？」

「さてな。……そういえば今日は中学校も入学式だったか？」

「そーだぞー」

そこで土道は空いた手を腰に当て、ふむと一言。

「なら昼頃には帰ってくると思うことだな……昼は何が食べたい？」

琴里は「んー」と思案するように頭を揺らし、そしてしゃきつ、と姿勢を正す。

「デラックスキッズプレート！」

近所のファミレスで最近人気のお子様ランチであった。

土道はもう一度、ふむと思案し

「じゃあ、昼は外食にするか」

「おー！本当かー！」

「ああ、じゃあ、学校が終わったらいつものファミレスでな」

土道が言つと、琴里は頭に置いてある兄の手をギュッと握って持ち上げ、首を後ろへそらす。

「ぜーっただぞ！地震でも火事でもテロリストが来ても空間震でもぜーったいファミレスにいくからな！」

「そこまで言わなくても大丈夫だ。どんなことがあっても必ず向かうさ」

「絶対だぞ！」

「ああ、絶対だ」

そこまで言うと琴里は、かばんもってくるー！といい階段を駆け上っていった。

先程、あまり甘やかすのはと考えた土道だったが、仕方有るまい。

可愛い妹のためでもあるし、それに二人とも始業式だ。今日ぐらいは寛沢しても良いだろう。

「そう考えると、夕食も腕によりをかけてみるかな……」

どうせ琴里とレストランへ行くのだ。帰りに何が食べたいか聞きながらスーパーで食材を買って帰るのが良いだろう。

リビングの窓から空を見る。澄み切った、という言葉がふさわしいくらい晴れ渡っている。

きつと何か良いことがある、そんなことをおもわせるような四月の空だった。

「えへへ……もう食べれないよお……お兄ちゃん……」(後書き)

＜白飯、味噌汁、鯖の塩焼き、そして、前日作りすぎで残ったサラダ番外編にするつもりのない裏話その1

両親が明日から出張で家を空けるといことなので土道くんは前日、朝から夕食の準備をし(朝食や昼食もしっかり作りながら)、本格的な洋食のフルコースを作ったという設定があったりなかったり。

＜少年はコンコンコンと三回ノックし、

ここでノックのおさらい。二回ノックはトイレの確認用。三回ノックは友人知人、親しい人野部屋に入るとき。四回ノックは初対面や礼儀が必要な人へのもの、らしい。

日本人はノックと言えば二回と答える人が多いらしいですけど……あまり気にしない物なのでしょうか？

＜ひどく達筆な字で『琴里の部屋』と書かれている木札がもちろん土道くんのお手製。

＜そこにはまるでアメリカ映画のSF物で見るとような破壊され尽くした町並みが

この文章を書いてて真っ先に思い出したのが『インデペンデンス・デイ』でした。あとは最近のトランスフォーマーとかでもありそうですね？

＜死者およそ一億とんで五千万人

現在、最大の死者を出したのがWW?で五千万人超と聞いたことがあるので、およそ三倍。実際にそんな規模の災害が発生すれば世界は一気に混乱に陥るのではないだろうか。

くきつと、こころいう風に甘やかすのが
土道くんは琴里ちゃんに対して色々しっかりするようには言いません
が、基本的に甘甘でデレデレです。

くデラックスキッズプレート！

ファミレスのメニューに必ず有ると言っても言いアレ。ちなみに作
者はお椀型に盛られたチキンライスだったりの上に国旗の旗が刺さ
っているものを想像した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0516ba/>

デート・ア・ライブで転生物

2012年1月1日22時45分発行